



発行所 東京都千代田区神田駿河台4丁目6番地 〒101-0062 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-6665-0319 www.nipponpapergroup.com/ newsprint@nipponpapergroup.com ©日本製紙株式会社2023

新年のご挨拶

新聞用紙事業の 持続可能性を追求し、 新聞社と共に歩む 変革元年

執行役員 新聞営業本部長 谷口 哲章

明けましておめでとうございます。日頃より当社製品をご愛顧賜り心より感謝申し上げます。

さて突然ですが、当社は今年創立150周年を迎えます。えっそうなの!? 社員からもそんな声が聞こえてきます。新年のご挨拶にあたり、当社の歴史を振り返りながら、新聞用紙事業の持続可能性を追求する新たな挑戦についてお話させていただきます。



抄紙と新聞の歴史

当社のルーツは渋沢栄一にあります。渋沢栄一が現在の東京都北区王子に抄紙会社を設立したのが1873（明治6）年。

渋沢栄一が抄紙会社を設立するに至った背景には、1867（慶応3）年、江戸幕府

使節団としてパリ万博を視察した時の出来事がきっかけでした。

万博会場で聴いたフランス皇帝の演説が、翌日には新聞という形になってその内容が掲載されていました。会場に居合わせなくても、皇帝の演説内容を知ることが

できる。渋沢栄一は情報インフラの重要性と近代国家の醸成、紙の新聞が必要と感じたのです。

渋沢栄一が設立した抄紙会社は、1893（明治26）年王子製紙と改称し、戦後1949（昭和24）年、過度経

済力集中排除法により、苦小牧製紙、本州製紙、十條製紙に3社分割されました。その時に北区王子の土地や工場を引き継いだのが十條製紙。現在の日本製紙へと受け継がれています。

当社の理念である「世界

の人々の豊かな暮らしと文化の発展に貢献します」には、新聞は社会のインフラであり、民主主義を支える根幹であると当時の渋沢栄一の思いを脈々と受け継いでいるものであります。



しかし150年もの間、新聞用紙の製造が順風満帆だったわけではありません。様々な苦難を乗り越えてきました。例えば、第二次世界大戦中には深刻な紙不足に陥りました。政府は用紙統制委員会を設置し、用紙の配給という物質的な制約を強めました。そして、その後の新聞統制による「一県一紙」体制にもつながっていきました。

近年の危機としては、1970～1980（昭和45～55）年代に起きたオイルショックとチップショックがあげられます。同年代に起きた燃料と原料の急騰は、紙の生産コストを直撃し、新聞用紙価格の高騰を招き、安定供給にも支障を来す状況に陥りました。

資源に乏しい日本の製紙業の基盤は燃料と原料をどう確保するかです。このダブルショックを経験した日本の製紙業はこれを機に変革していったと考えられます。

まずは燃料転換。当時、重油に代わる安定・安価な燃料として石炭が浮上。メーカー各社は国際情勢に左右されないエネルギーとして石炭への転換を推し進めま

した。当社は1983（昭和58）年に岩沼工場4号ボイラー、1986（昭和61）年に釧路工場8号ボイラー、1993（平成5）年に八代工場9号ボイラーを稼働させています。

次に原料転換。急騰した輸入木材チップから安価な新聞古紙への転換。次々と新聞用紙工場には古紙プラントが設置・増設されました。導入当初は異物除去もままならず、紙面への影響もあったと推測できますが、新聞社の理解のもと、メーカー側も除塵技術を向上させ、更に中性抄紙化により、現在は古紙配合率80%を可能にしています。

同時に、軽量化による省資源も推進し、今や日本の新聞用紙は世界一の高品位と言っても過言ではありません。加えて、世界に誇る古紙のリサイクルシステムが原料の安定調達を支えました。

このような新聞社とメーカーの相互理解と協力により進めた変革は、その成果を双方で享受することにより、新聞用紙の3大原則、安定供給・安定品質・安定価格を実現しました。これこそがこの40年間、新聞社とメーカーが共に歩んできた軌跡であり財産であると感じています。



ウクライナ情勢

それが2022（令和4）年2月24日、その歴史を根底から覆す出来事が起きました。ロシアによるウクライナ侵攻です。

ロシアのウクライナ侵攻は、主力エネルギーとなった石炭に大打撃を与えました。石炭価格は急騰、侵攻前と比較し4倍以上となり、今なお下落の兆しは見えていません。

更に追い打ちをかけているのが、新聞古紙の需給逼迫です。ロシアは新聞用紙の輸出国であり、その量はカナダに次ぐ世界2位とされています。侵攻後、ロシアの輸出が滞ったインドなどの輸入国は代替供給を韓国に求めました。韓国の主力古紙調達先は米国ですが、世界的なコンテナ輸送混乱期も重なり十分な原料確保ができず、韓国は調達

の矛先を良質かつ近距離である日本に向けました。そのあおりを食った日本の新聞古紙は急騰。現在ロシアの輸出は落ち着きを取り戻してきたようですが、国内の新聞古紙は発生減やユーティリティ原料として板紙分野にも広く使われるようになったため、需給バランスは大きく崩れたままとなり、価格はいまだ天井が見えず、量の確保も困難な状況にあります。

併せて新聞用紙に化学パルプを高配合することで原料不足対策にも効果が期待できます。

ただし、生み出されるセルロースの用途拡大策も必要で、バイオリファイナリー製品の開発にも着手していきます。この取り組みには、木質資源を活用した脱炭素とエネルギー転換、そして原料確保を同時に実現できる可能性を感じています。

原燃料を制する者は製紙業を制する

明治時代に興った日本の製紙業は燃料と原料確保の歴史です。サステナブルな新聞用紙事業を追求するには原燃料対策に取り組みなければなりません。今、大きな転換期にきていると感じています。

まずは燃料対策。GHG削減というのは世界の潮流であり実現させていかなければなりません。当然のことながら、高騰した石炭を使わない脱炭素の施策に取り組んでいきます。

更に脱炭素を実現する施策の一つとして、木質資源である化学パルプの活用が重要であると考えています。

化学パルプは木質チップから取り出したセルロースですが、同時に残り半分の成分から「黒液」と呼ばれるバイオマス燃料を抽出することができます。これは自製のエネルギーになります。つまり化学パルプの生産を最大化することで、黒液（バイオマス燃料）を生み出し、自製エネルギーとして活用し、石炭依存からの脱却を目指すというものです。

併せて新聞用紙に化学パルプを高配合することで原料不足対策にも効果が期待できます。

ただし、生み出されるセルロースの用途拡大策も必要で、バイオリファイナリー製品の開発にも着手していきます。この取り組みには、木質資源を活用した脱炭素とエネルギー転換、そして原料確保を同時に実現できる可能性を感じています。

もう1点は新聞古紙対策です。

SDGsの目標12「つくる責任つかう責任」には、ターゲットとして「12.5廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する」「12.6特に大企業や多国籍企業などの企業に対し、持続可能な取り組みを導入し、持続可能性に関する情

報を定期報告に盛り込むよう奨励する」とあります。

まさに新聞古紙のクローズド・ループリサイクルは、このターゲットに合致しており推進していきたいと考えています。更に新聞が新聞用紙に生まれ変わる「水平リサイクル」の構築は、資源の国内循環型社会が実現できます。

国際情勢の変化を受け、新聞用紙の製造構造は大きな転換期を迎えていると考えています。

持続可能性を追求した次の時代へ進もうとしています。しかし、これらの挑戦はメーカー単独ではできません。新聞社皆様のご理解とご協力があって始めて実現することができま

渋沢栄一のDNAを受け継ぎ未来を拓く

150年前に渋沢栄一が思い描いた理想はDNAとして脈々と受け継がれています。そして当社はこれからも新聞用紙の持続可能性を追求してまいります。

最後に当社のスローガンは「木とともに未来を拓く」、そして新聞用紙事業においては「新聞社とともに未来を拓く」です。今年は新聞用紙の変革元年として、新聞社の皆様と共に新時代を創ってまいりたいと存じます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

企画・制作・発信・印刷・配送をワンストップで 情報発信のプロが集まる新会社、誕生

株式会社 西日本新聞プロダクツ

今回ご紹介致します西日本新聞プロダクツは紙の新聞事業に関わるグループ5社と本社業務の一部を統合し2022年4月から本格始動しました。本社を福岡市博多区井相田(旧製作センター)に置き、関連拠点は4カ所。グループ社の力を結集し次世代を見据えた企業体への進化を遂げようとしている新会社について、一木専務取締役役にお話を伺いました。



〒812-0881 福岡市博多区井相田2-1-60
TEL.092-575-6000
<https://www.nishipro.co.jp>



一木 弘信 専務取締役

設立の経緯

新聞の発行部数は年々減少していますが、西日本新聞ファン(コアな読者)の方々が存在する限り紙の新聞が無くなることはないと考え、中長期視点で新聞発行体制を継続するために新会社設立の検討を開始しました。合併5社(西日本新聞印刷、西日本新聞エス・ピーセンター、西日本新聞トップクリエ、西日本新聞福岡販売、ぐらんぞ)の業務内容を精査し、新聞製作に関わる編集・製作・販売部門の一体化や業務の削減・見直しによるコストメリットを出し、将来に渡って安定的に継続した新聞発行体制を構築、企業体の更なる発展、従業員の安定雇用を考えた結果、この会社が誕生しました。

印刷事業を中核に各種業態との相乗効果を期待

西日本新聞プロダクツの中核事業は印刷事業となります。当社は輪転機、建物を保有しております。

輪転機の稼働率が低いと効率も悪く、稼働率を上げ収益に結び付けることがポイントとなります。将来的には整備時期を除けば24時間運転できる体制を考えていますが、そこまで印刷物を受注できるかが鍵となっています。

今後は取材班や編集者、デザイナーなど各種業態を組み合わせ、九州の観光地PRのお手伝いや自社企画などで新聞輪転機を使って印刷物を作るという動きを進めていきます。最終的には様々なリソースの成果物として印刷を商品化できれば輪転機の稼働率アップにつながると考えております。

職場環境に配慮

今回の合併に伴い、製作センターを大規模にリフォームしています。一部の方々は福岡市の中心・天神から井相田での勤務地変更となるため、社員がここで仕事をしてみたい!と思えるような魅力ある職場作りをコンセプトとしておりま



す。印刷オペレーター用としてシャワールーム、災害時には雑魚寝ができる畳の休憩所を設置。女性従業員が増えることから、女性用トイレ、パウダールームを整備。近隣に食事場所が少ないことからキッチンカーの導入及び弁当業者の誘致を行いました。また、見た目だけではなく、働き方改革の観点からフレックス制度、在宅勤務の導入など様々な面で働きやすい環境に配慮しています。

総合生活プロダクションを目指して

西日本新聞プロダクツのリソースを結集し新しい事業に挑戦したいと考えています。昨年10月にはEC(電子商取引)サイト「西日本新聞セレクトモール」がスタートしました。当社は西日本新聞エス・ピーセンターの流れをくんだコールセンターを備えており、シニア層向けの対応としてインターネットのみならず電話での注文も可能です。11月には販売店の課題を解消する配達管理サービスをプレスリリー

スしました。お陰様で業界紙に取り上げられ問い合わせが殺到し担当者が全国の新聞社へ説明に飛び回っています。次の展開として新聞販売店ソリューションにも取り組んでいきます。スマートサービスという言わば販売店の事務代行サービスです。領収書の発行作業、問い合わせやクレーム対応、新聞配達の手配や手配、決済手続きなど販売店が抱えている課題を当社がソリューションとして提供したいと考えております。最後になりますが今後も総合生活プロダクションをコンセプトとし行動していきます。



リフレッシュルーム



合併に伴い新聞印刷業務を知るために工場見学を行う別部署の女性社員たち

新聞社との協業、 自治体との連携によるSDGs活動



読売新聞西部本社主催「九州・山口 未来の森」植樹式が昨年10月下旬、山口県の日本製紙堀社有林で開催されました。未来を担う子供たちへSDGsの理念を伝えるため地元小学生や関係者40名が集い、森林保護や二酸化炭素排出問題、SDGsとの関わりなどそれぞれの思いで250本の苗木を植樹しました。参加者は達成感を得るとともに、森林保護や維持の大切さなどを見つめ直す機会となったようです。植樹式の様子についてご紹介致します。

九州営業支社 支社長代理 池田 隆男



主賓記念植樹



記念写真(中央小学校)

由緒ある地域「徳地」

平安末期、1180年平重衡の南都焼討（源平合戦）により焼失した奈良東大寺の再建のため、1186年俊乗房重源上人は再建の指揮に当たりました。この徳地地域一帯から再建のための用材（1,000本程度）が伐り出され陸路を人力で、河川や航路を利用しながら奈良まで運ばれました。杣山の道づくり・橋架け、伐採や運搬は困難を極め、人夫の負傷の治療や疲労の保養など、その苦労は大変なものだったそうです。

東大寺復興の良材を伐採した後も毛利藩の御立山とされました。明治期には国有林となり、天然林を本格的に伐採し跡地へはスギ・ヒノキが植樹され、生育条件に恵まれた優良人工林が出来上がっています。

昭和40年皇居新宮殿「松の間」の内装材として、昭和42年から43年には日本の名勝錦帯橋の橋脚材として、滑マツが使用され徳地は良質な木材の産地として知られました。

苗木はエリートツリー（スギ）

今回の植樹ではエリートツリー（スギ）230本、ヒノキ10本、マツ10本、合計250本を使用しました。エリートツリーは普通の苗木に比べ育つ速さが1.5倍以上、花粉量が半分以下の特長を併せ持ち、国から認められた苗木です。成長期間が50年から30年に短縮でき、林業に関わる皆さんの負担を助ける「切り札」と言われるほど期待されています。また、生育が早いことからCO₂を多く取り込み地球温暖化問題に貢献し、花粉量が少ないため花粉症の人を減らせることも見込まれています。



エリートツリー
(スギ)

関係官庁からエリートツリーの年間植林苗木数に占める構成比率も拡大する方針が示されました。2030年までにエリートツリーの構成比を全苗木の1/3、2050年には9割以上とする計画としています。このように林業に関わる仕事をしている皆さんへの手助け、地球温暖化問題や花粉症の人を減らせる効果と夢のある苗木を植樹しました。

地元小学生、関係者40名が植樹



〈上〉主賓・新聞社幹部のみなさん 〈下〉中央小学校決意表明

晴天のもと、読売新聞西部本社 国松社長、KRY山口放送 林社長、山口市 伊藤市長、当社 清水部長の来賓挨拶から式典を開始。山口市立中央小学校6年生14名が「30年後の将来の自分」を各自宣言し、感動の雰囲気の中植樹手順の講義を受けました。0.1haの敷地内に2m間隔に用意した250個の穴に1本ずつ丁寧にスコップで土をかけ、更に乾燥を防ぐための落ち葉で根元を覆い苗木を植えていきました。

植林地の斜面に慣れない小学生もいたものの、けがもなく作業を終えました。中には予定本数以上に苗木を植えた小学生もいて活気がありました。敷地の周りには鹿などの食害防止用ネットを設置し、苗木が確実に育つよう工夫しています。準備した苗木

木を植え終えた後小学生と関係者との記念撮影を行い、読売西部七日会西村会長の挨拶で式は終了しました。



植樹講義の様子

新聞社との協業、自治体連携の先へ

「木とともに未来を拓く」のスローガンを掲げている当社は自社林を活用した森林価値最大化を追求しています。社有林の有効利用やエリートツリーを始めとした育苗技術の活用は当社の掲げた目標に合致しており、今後様々な場面での展開が期待されます。

この度の植樹式で「地域の特性や自治体連携、森と紙の親和性があった」との評価も頂いています。当社の技術や製品で既存のお客様との協業や自治体連携による地域活性・貢献にお役に立てるよう、更に普及活動を加速できればと感じています。また、地域が抱えている問題や未来に起こりうる事象に深化した当社ノウハウが活用されることを願っています。

最後に読売新聞西部本社様には多大なご支援・協力頂きありがとうございました。



植樹の様子



小学生に指導

日本製紙ランナーズ77 活動報告

気合と根性 ～初めての42.195キロ～

かわら版NIPPON 編集委員 沖山 勇介



77はフルマラソン42.195kmを新聞用紙に換算すると約77連(77,000枚)であることが由来となっています。



2022年11月3日、晴天に恵まれ「第32回ぐんまマラソン」が、前橋市の正田醤油スタジアム群馬を発着点に開催され、約1万人のランナーが出走しました。

今回は谷口本部長が10キロの部、私は人生初めてのフルマラソンに挑戦。猛練習して臨むつもりが足の負

傷もあり、不安な状態のまま当日を迎えました。

朝、痛みを軽減させるため、左膝にテーピングを施していると、高校3年最後の夏、肘痛を誤魔化すため右腕にテーピングをして投げたことを思い出し、「あの頃は気合と根性で何でも切り抜けられたじゃないか!」と。不安が一掃し、行けるところまで行く、気合と根性作戦と決め、スタートしました。

スタートからハーフまでは快調なペースで進むも、噂通りの30キロの壁が出現、気合と根性で突破を試みるも思いが足りず、残りの

10キロは、つる→歩く→走る→つるの繰り返しで、作戦は大失敗、気合と根性だけではどうにもならないことを痛感させられました。

結果は前半の貯金を見事に後半で使い果たし、4時間3分25秒。

目標の4時間切りには及ばずも、走り切ったことに関しては、自分で自分を褒めてあげたい、すごく辛い42.195キロでした。

安心・安全な大会を運営された上毛新聞社、関係者の皆様へ改めて感謝致します。



足がすりながらも気合いで走る 39km 地点

3年ぶりのNAHAに参戦
～ラストランと決意して～

新聞営業本部 技術営業グループ 佐藤 孝

2022年12月4日、第36回NAHAマラソン(那覇市他南部4町村)に、九州営業支社池田支社長代理とともに参加しました。

コロナ禍により前回2019年から3年ぶりとなる大会で、沖縄全体が「待ちに待った!」という熱気の盛り上がりにより我々2名も乗せられ、無事制限時間内に完走することができました。

個人的には、腰の異常が脊柱管狭窄症と診断され、無理な運動を止められいったんはマラソンを断念したもの、こんな形で引退す

るのも何か納得いかず鬱々としていましたが、天啓のごとくNAHAマラソン開催の情報を得て、今回、人生最後のラストランと決意し参加しました。

当日、スタート時は暑い程の天候でしたが、前半の厳しい登坂コースでは程よく雨も降り、最高気温も26度止まりとNAHAにしてはランナーに優しい条件。私も、腰の状態を気遣いながら途中休みながらのスローペースに徹し、沿道の熱い応援と冷たいコーラに元気づけられ、お決まりの35kmからの地獄

左:佐藤
右:池田

の苦しみを存分に味わい、ゴール前では折れる心を高校生の声援に後押しされながら、4時間33分でゴールすることができました。その後も腰を含めた体調の急変もなかったため、今後のフルマラソン参加についても再考の余地ありと思っています。

3年ぶりのマラソン開催ということと、コロナ対策もあり、沖縄タイムス社を始めとした関係者の方々は非常に難しい大会運営になったと思いますが、無事大会が成功裏に終了できたこと、皆様には感謝致します。

わたしたち会社の仲間がプロ野球選手として羽ばたきます

2022年10月20日、プロ野球ドラフト会議が開催され、石巻工場野球部の宮内春輝投手が、北海道日本ハムファイターズから6位指名を受けました。同野球部からは7年ぶり7人目のプロ野球選手の誕生となり大いに盛り上がりました。

期待に胸を膨らませ北の大地へ羽ばたく宮内投手にお話を伺いました。

社会人野球で過ごした4年間を振り返って

石巻で過ごした4年間は調子の波が大きかったですが、だからこそキャッチボールを大切に、一つ一つの動作の確認や意識する部分を変えてみたり、試行錯誤を繰り返しながら自分の形を作っていた4年間だったと思います。

野球以外での楽しみ

休日は気分転換にするドライブが好きで、買い物にも行ってリフレッシュすることが多いです。

新天地の北海道には観光名所や大自然、おいしいグルメがたくさんあるので、今からドライブで各地を回るのが楽しみです。

石巻工場での業務

主にマシンの点検作業に従事。加えて修繕の補助なども行っていて、マシンの構造や修理工具などの使い方も学ぶことができ、とても貴重な経験でした。

また、職場の方々もいつも応援をしてくれて、感謝の気持ちでいっぱいです。

プロ野球選手になってからの目標

開幕一軍、まずはここが目標です。それから一試合ずつの積み重ねで、結果的に40、50、60試合登板につなげられればと思っています。

また活躍することで自分を大きくしてくれた石巻への恩返しと、石巻ゆかりの選手として石巻の元気な姿を全国の皆さんに届けることも大きな役割だと思っています。

【プロフィール】
生年月日:1996年5月26日生(26歳)
身長/体重:176cm/75kg
投打:右投げ右打ち
出身地:千葉県
出身校:千葉県立多古高校、明星大学



【特長】

思い切りのいい右サイド投手。大学4年秋の首都大学野球リーグ二部で優勝、最優秀選手賞のタイトルを獲得。入社後は1年目から頭角を現し、「東北の林昌勇(イム・チャンヨン)」と呼ばれ、リリーフエースとして大活躍。最速152キロの直球を軸に、スライダー、カットボール、シンカーを織り交ぜ、打者を圧倒するのが投球スタイル。